

戦略企画会議から

Progress Report from the Strategic Planning Committee

戦略
企画
会議

アイするスポーツプロジェクト始動 ～視覚障がい者ゴールボール体験会報告～

日本眼科学会では、日本眼科医会と共同で本年より「アイするスポーツプロジェクト」を開始しました。我が国の障がい者スポーツは、日本パラリンピックの父とも呼ばれる整形外科医、中村 裕氏の情熱的な普及活動が端緒となり今日まで発展を続けてきました。視覚障害をもつ方と健常者の方が共に活躍し、共に生きる社会を構築するために、眼科医も重要な役割を担っています。来年には東京2020オリンピック/パラリンピックが開催されます。日本眼科学会ではこの機会に、視覚障がい者スポーツの認知度を高め、その普及と振興に継続して役立ちたいと考えています。

「アイするスポーツプロジェクト」の最初の活動として、今年度の第123回日本眼科学会総会の最終日となる4月21日の14時～15時半に、東京国際フォーラムのホールB7において、「視覚障がい者スポーツ体験会」を開催しました。東京2020パラリンピックでは、22の正式競技が実施されますが、今回はそのなかで視覚障がい者を対象にしたチーム球技である「ゴールボール」を体験競技に選びました。ゴールボールは3人で1チームを組み、鈴の入ったボールを転がし、相手のゴールに入れて得点を競うものです。

攻撃側は視覚以外の情報を頼りに幅9メートルのゴールに向かってボールを転がし、守備側はボールの中の鈴の音や相手選手の足音などを頼りに、ボールが転がってくるコースを察知し、身体を横たえ壁をつくってボールを止めます。ボールはバスケットボールとほぼ同じ大きさですが、重さは約2倍もあり、攻撃にも守備にもパワーを必要とする、まさに身体を張って戦うスポーツと言えます。

今回のスポーツ体験会では、3月15日から約1か月間の参加募集を行いました。募集開始時はどれほどの人が集まるのか不安でしたが、最終的に定員として設定した約60名の方にご参加いただくことができました(図1)。参加者の約半数は眼科医で、「アイするスポーツプロジェクト」委員の清水朋美先生(国立障害者リハビリテーションセンター病院)、日本眼科学会執行部から後藤 浩理事、村上 晶理事ら、日本眼科医会執行部から白根雅子会長、前田利根副会長らも参加しました。また、体調に不安があって惜しくも体験できなかったという人をはじめ、多くの方々に見学にお越しいただきました。

会の進行にあたっては、日本ゴールボール協会副会



図1 参加者集合写真。

アイするスポーツプロジェクト始動～視覚障がい者ゴールボール体験会報告～



図 2 日本ゴールボール協会の選手らによるデモンストレーション.



図 3 ディフェンスの体験練習の様子.



図 4 体験ゲームの様子.



図5 お土産に配布したロゴ入りウエットティッシュ。

長の西村秀樹氏をはじめ、同協会から派遣いただいたスタッフ・選手の方々に多大なご協力を賜りました。この場を借りて篤く御礼申し上げます。まずは、西村氏からゴールボールのルール説明があり、その後、選手たちによるデモゲームを観戦しました(図2)。選手たちのアイシェードをしているとは思えないような激しい動きに圧倒されながらも、いよいよ体験です。全員で攻撃(ボールのスロー)とディフェンスの基本動作について習ったあと(図3)、最後は6人ずつの10チームに分かれて試合を体験しました(図4)。例える

ならサッカーのPK合戦が続くような緊張感です。ボールが転がっている間は音を立てることなく静かにしなければいけません。ゴールが決まるたび、またディフェンスが良いセーブをするたびに、会場に大きな拍手が鳴り響き大盛り上がりでした。見た目よりもハードなスポーツであることが体験者の汗や息遣いでもよく分かりました。体験者は誰一人として怪我することなく終了することができましたのでよかったです。体験者と見学者にはお土産として「アイするスポーツプロジェクト」のロゴが入った除菌ウエットティッシュをお持ち帰りいただきました(図5)。

一般の方々、そして眼科医の間でも障がい者スポーツの認知度は残念ながらまだ高いとはいえません。実際に今回の体験会でゴールボールのことを初めて知ったという方も多くいらっしゃったようです。日本眼科学会では、今後も「アイするスポーツプロジェクト」を通じて、視覚障がい者のスポーツ活動を応援してまいります。

なお、東京2020パラリンピックでは、幕張メッセでゴールボールが開催される予定となっており、女子チームは金メダルが期待されています。